
ハリケーン ラブ

中野 かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリケーン ラブ

【Zコード】

Z4572C

【作者名】

中野 かおり

【あらすじ】

男前で乱暴な高校一年の女子、奈央。問題起こしては違う学校へ、また問題を起こしては違う学校への繰り返し。あまりにもひょんなことで男子校に入れられてしまつ。そこである少年に恋に落ちてしまつ奈央だが…この恋どうなる?!

プロローグ（前書き）

この連載を頑張って書いてこくので、読んでくれると光栄です！よ
ろしくお願いします！！

プロローグ

…何だよこの気持ち…

…何だよあいつ…

…あいつの笑顔が頭から離れねえ…

…あたしあかしいのか？！

…あたしどうしちゃつたんだ？！

第1話 いんな毎日ー

今…

あたしは学校の廊下を歩いている。

あたしが通るたび皆が後ろを振り返る。

「何あいつ。あもー！しゃしゃってんの？？女男だあー！！！」

あやはめーと仲間と笑っているのは、どつかの社長のお嬢さんとか
いづ…安田奈々つて奴…。

「こいつは思い知らせなきや分かんねえよつだな…
あたしはくふつと反対の方を向き、安田つて奴等の方に歩いていき、
安田の田の前に立つておもいつきり睨み付けてた。

「…何？」

顔は笑つて偉そうにしてるが、心底怯えてるのが見え見えだ。

「あんた…わいつこいつ等の前で何言つてた？もつ一回言つてみろ
よ。」

「…」

相手は田をやられました。安田のダチ等は、安田の後ろで完全に法
えてる。

周りの奴等は見てみぬフリだ。

「もう一回言えつつてんだろーが！！！！！」

安田の胸ぐらをつかんでおもいつきり怒鳴った。

「すじませ……ん……」

田をそらして謝る安田。

もうめんどくせえ。

「次今みたいな事したら…ぶん殴つからな。」

ぱっと手を離し、あたしはその場を去つた。

みんな恐ろしい怪物を見るような目であたしの事を見てくる。
つたく…悪いのはあっちなんだから、そんな目で見んなつーの…！」

あたしは飯田奈央。現在高校一年。言葉使い悪いけど、一応女。四人兄弟の末っ子で、上は全員男。母さんはあたしが小さい頃、違う男とくつついてどつかいつちました…。つまり、あたし以外家族全員男。タフさも元気さも半端ねえ。

あたしは今まで6・7回転校してきてる。全部暴力とか、厳しい学校は暴言とかで退学になつちまつてんだ。自分で言つのも何だけど、成績はかなり優秀だぜ？

それなのに…最近の学校は厳しすぎなんだよ…兄さんたちの時は、めつたに退学なんかなんねえつつってたのに…！
まあ、さつき位なら退学になんねーだろうけどや。

* * * * *

「ただいま」

「あ、お帰り奈央。」

こいつは三男の英章。ひであき高一。あたしは英兄って呼んでる。唯一この家族で、まともなやつだ。（笑）年が近いし、あたしとは結構仲良いんだ。

「英兄いたんだ～今日の夕飯何～？」

そう。夕飯係は英兄。英兄の作った飯はまじづめえんだ…！
あたしの100倍な…！」

「今日は久しぶりに焼肉だ…！」

「お~~~~~！――やるな英兄！――」

こんな会話をしながら英兄と盛り上がりっていた。

「ただいま」

「あ！この声は達也兄だ！」

「お帰り～」

「ひゅ～外はあちい～！中は天国だ～」

この達也兄は我が家の中の次男。大学一年。この兄ちゃんが乱暴者でひどいんだ。大学に入つてからはおさまつたが、高校・中学と暴れて、あたし以上に沢山の人に怪我を負わせてた、強者だ……；

「達也兄、最近は本当に暴れてねえだろうな？！」

英兄は聞く。

「あつたりめーだ！あ、そういうえば、俺、彼女出来たんだぜ――！」

『え？』

あたしと英兄は声をそろえて言った。

「へへつあつちから告つてきてよ！俺に一日惚れだつたんだと！今では俺もベタ惚れなんだよ。」

「へえ~~~~！あの達也兄が彼女を？！暴れるだけの脳ナシがか？！……つと！そんなこと本人の前で言つたら殺されちまう……」

でも達也兄幸せそうな顔してたな～

あたしも彼氏将来出来んのか？…出来るわけねえか。こんな男っぽい女誰が好きに…

「お…奈央！奈央つたら…」

はつ…！

「なつ…何だ？？」

「一点見つめてぽけらーつとしてたぜ…？大丈夫か？そんなに達也兄のこと衝撃的だつたか？！まあ確かに衝撃的だけど…」

英兄が心配そうに聞いてきた。

「奈央は彼氏作んねーのか？？俺様みてえなかつけえ彼氏…」

得意そうに達也兄は言った。

「ばーか！あたしみたいな男っぽい女に彼氏なんか出来るわけねーだろー！大体達也兄みたいな彼氏ならいなー方がマシだばーけ！」
べろべろべーーと言つてあたしは達也兄をからかつた。

「お前…このまにそんな口悪くよくなつたんだ? あ? ふざけ切れしてん達也兄。

「 もや～～！ ！」 めんなさあ～～いー。 おぬしてお兄やお～～。 おやー もやー 言こながり逃げるあたしと廻り掛かる達や兄。 ちこつちこつ 三回上り下り うらやまうばう。

あがいがちの様子を見た。ハリスは笑ひ、英兄

今日も楽しい夕飯が食えそうだ！！

あたしはこの時、これから起じる事件について知る予知もなかつた

100

第1話 いんな毎日ー（後書き）

今回は、達也・英章・奈央について説明（紹介）しました。出てき
次第、お父さん・長男の紹介もします（^ 3 ^）／「あれ？お父さ
んと長男は？」と思った方、これから出てくるのでお楽しみに～（
^ Q ^）／＼（笑）

あたしは朝一から校長室に呼び出された。

「はあ？？？たいがくう？？？？」

はい、遅学です。

「世界の歴史」

「あ？ あいつか？ あいつになら昨日あたしの愚痴大声で言つてきたから、軽くがんとばしてやつた。… それが何だ？」

安田さんは、やんばるの社長の娘
しれりなお姫様……」
は知っているかい？」

堂か？」

…そのヤスダ堂です。安田さんのお父さんには我が校は沢山助けられていてね。安田さんが君に昨日ひどい目にあわされた、とお父さんに言つたらしくて、今朝お父さまから“飯田奈央を退学にしる。さもないともうこの学校には一切援助はしない。”と言われてしまつてね…彼女のお父さんの援助で、この学校はかなり助けられているんだ。君をこの学校においてあげたい。…だが…すまない…」

なんで

「 な て た 。

「…本当にすまない…。あと、彼女のお父さんが君は男子校に行く

べきだと言つて…これ…書類…」

あたしはダンツ！と思いつきり机を叩いた。

「なんなんだよ…！大人の意見で…大人の勝手な考えで決めてんじやねーよ…！」

書類を校長から奪い、校長室を走つて出た。

ダダダダ…

…何なんだよ…

この学校は今まで一番良かつた。

これまでの学校は、あたしが乱暴者だと聞いて、教師は全員あたしに對して非難する目で見てきた。

…この学校は違つたんだ。こんなあたしでも、校長から誰から、暖かくむかえてくれた。

あたしもだからそれに應えようと、成績はいつもトップであるよつ、問題はあまりおこらないよう、頑張つた。

けれど…最終的に裏切られた。

大人は…何でこんなに子どもを裏切るのだろう…

「おかあたん、にもついつぱいもつて、ビニリーベのお？」
「近くのスーパーに行くだけよ。……奈央、いい子でね…」
「…おかあたん…？」

「…」

「まつてよう！おかあたん！おかあたん！おかあたん～ん～～～」

……はあはあはあ……

走りに走ったあたしは、近くの公園のベンチにどかっと座った。

また昔の嫌なこと思い出しちまった…

「だめだなあ…あたし…」

こんなあたしだって、女なんだ。言葉や力は強いからって…心も強いなんて限んねーんだ…。

次…男子校に入れられるんだっけ…？

ガサガサ…

校長からもらつた資料を、とりあえず見てみた。

“ 栄然男子高校 ”

「えいねん…つて…結構優秀な学校じゃねーか…」

「よつよつ…しゃああああああああーーーー！」

もー男子校だらうがどこだらうが、あたしは負けねえ！！強くなる
！！

見てるよーー！

第3話 秘密

今日は、栄然高校の入学説明がある。

新しい制服は、上がブレザー・男子校だからもちろん下はズボン。ていうか…女のあたしが入ってほんと大丈夫なのか??

「いじか…うわ…！」

でつっつけえ…………！…！

こんなどこに毎日通えんのか…わくわくするな…！

…

「よし！入るか！」

あたしはすんすん学校へ入つていった。

…

『校長室前到着』

「失礼しま～すつ…シーン…

あれ？

「あの…」

…

「わつ…」

「ギヤ…」

…

突然校長がソファの陰から飛び出してきた。

「ガハハハハハ…！君が転校生の飯田奈央さんだね…？」

…はあはあ…

…

まじびびつ…

なつ何なんだこの校長は：

「えつ、あつ、ああ。そうです。」

今のでもう疲れたし…

「はつはつは！君ほんとに女かい？胸はないし、目つき悪いし、髪はボサボサだし…つけねらいか？！」

グサグサグサつ…！

つ…畜生…この校長！あたしが女の要素のだって言いたいのか！才ナベとも言いたいのか！

「…べつ…別にそこまで言うことねえだろ…」

ちょっとムスッとしてあたしが言つと

「あつ…すまんかつた…まあ許してくれ！ガハハハ！」

…はあ…

「そーじやそーじや…わしから君に言いたい事は、簡単に一言。君が女子つてことは…私と奈央君の秘密じゃよ？」

へ？？

…つてことは…

「あたしは…男として毎日を過ぐ…つてことですよね…？」

「つまりそうじや。まあ、君なら元から男前だから、何の問題もないじやろ！あと…その“あたし”つていつのはやめるんじやよ。男なら“俺”が基本だ…！分かつたか奈央君…」

「はい…」

「何かあつたら、わしのところにいつでも来い！わしは奈央君の味方じや。それに…君とは何だかいコンビになれそうじやしな！」ガツハツハツハツハ…といつて大笑いする校長。

あはは…：

この校長は今までに一番テンション高いな…

“わしは奈央君の味方じや。”

この校長なら信じれる気がした。

あ！ そ、うだ。

「あの…校長の名前って何ですか？」

「おひとー。おうじゅうじゅうじゅー。私は、佐渡風。佐渡校長でーーぞー。」

... 11 画面で表示される

「あらかと！佐渡校長！あたし……あ、俺！！元張つか！」
あたしはニッと笑つた。

「ちうじやー！その意氣じやー！明日から頑張つてくれいー！あ、ここの資料に学校の事詳しく述々書いてあるから、ちゃんと読んでくれんだぞ？？あと、新しい教科書とかも入つてるからなー！」

「はい！校長！じゃ！失礼しました！！」

バタン！

あたし…明日からホンモノ『男生活』か…
まあ、しゃべる時は
「俺」で、その他はいつも通りでいいんだよな…

…これから的生活…楽しみだな！

第3話 秘密（後書き）

男として学校生活を送るーことになつた奈央。そこで…奈央がしゃべる時は「俺」をつかいますが、奈央が心中で思つた時は「あたし」を使わせてもらいます（^ ^Q^ ^）／＼そうじやないと、本当に奈央が男なんだか女なんだか、作者の私までわからなくなつてきますからね。（笑）よければ評価のほうも宜しくお願ひします（* ^ _ ^ *）

第4話 登校初日！

「ただいま」

「あ、おかえり～！ビーだつた？！入学説明会。」

いかにも興味津々な英兄。

「めっちゃでかい学校だつた…校長はありえねえ位テンション高かつたし。（笑）」

嬉しそうに話すあたしを見て、安心したのか、英兄は

「良かつたな。今度こそ信じれる学校が見つかったんじゃね？校長がいい人なら教師も当たり多いかもよ？？（笑）」

当たりつて…教師はクジかよ…；

「ああ… そりだといいな…。」

あたしはその他にも、校長とどんな話をしたとか、自分男として学校生活を送ることになつたとか、色々英兄に話した。

英兄は、やつぱりあたしの心の支えだ。
ずっとな…

* * * * *

次の日、あたしは一段と張り切つて学校に向かつた。

「うつしゃ！頑張つぞ！！」

軽く意気込みを入れ、あたしは走りだした。

ドンッ

「痛つ！！！」

誰かとぶつかり、おもいつきりしりもちをついた。

ニシテアリバウニシテアリ

……いやつだな

「あつさんきゅーー！ 悪いなー！」

そういうて立ち上がつたあたー

「今度からは気を付けまちようね～おチビちゃん??

あたしは果然と立ち戻りました。

おちびちゃん？

しまいには赤ちゃん言葉？

：完璧全にあたしのこと馬鹿にしてたな

まわりにいた人全員がこつちを見ている。

や
べ
え

今“あたし”つつつちやつた……

しかも大声で

あたしは軽く咳払いをし、
「おっ！やべやべ！遅刻しちまつ。急がなきやなあ～！」
と言つて全速力で走つて玄関に向かい、そのまま職員室へ直行して
いった。

はあはあ…

朝つぱらからよけいな氣使わせやがつて…

…んじや、入るか！

ガラガラガラ…

「失礼しまあ～す……」

職員室はやはりどこの学校もコーヒー臭い。

「えと～…1年B組担任の前川先生つて…」

「わたしよ。」

「わっ！」

目の前に美人でスタイルが良く、いかにも女性らしい前川先生がいつのまにか立つていた。

「あなたが飯田くんね？ 可愛いじやない 私は1A担任の前川由佳里。^{まえかわゆ} よろしくね！」

そういうつて手を差し伸べられた。

「よ…よろしくお願ひします…」

あたしと前川先生が話をしているところを見つけた校長が、嬉しそうにこっちに向かってきた。

「おやおやここれは。飯田君と前川先生。飯田君、今日から君は「」この生徒だつ！ 頑張るんだぞ～！ 前川先生、よろしくお願ひしますね。」

『はい。』

校長はスキップしながら校長室へと戻つていった。

「さ、そろそろH.Rが始まるわ。こきましょ。」

「あ、おひ…！」

こうしてあたしたちは教室へと向かつた。

* * * * *

教室へ向かつている最中、先生が話だした。

「あなたが入る1年A組は、頭が良い子、スポーツが出来る子、イケメンから音楽家まで、選びぬかれた特別な子たちの集まりなの。どの学年でもA組はそういう子たちの集まりなんだけど、今年は特にすばらしい子ばかりで…。」

… そうだったんだ…

そりやすげえな…

「でも…何で俺みたいのがA組なんだ?」

「あなた、前の学校で凄く成績優秀だったんでしょ? そりやA組しかないじゃない」

ヤケに嬉しそうな先生。

なんか…あたしすごいこといろいろに来ひまつたんじゃねーか?!

「あ、A組はここよ。」

中からギヤーギヤー騒ぐ声が聞こえてくる。

…ほんとに優秀なのが…? ! ?

「じゃあちょっとここで待つててね。入ってから、その時に入ってきて!」

そういうつて前川先生はウインクし、教室へ入つていった。

… IJの先生もテンション高いんだな…

中から声が聞こえる。

「今日は、転校生を紹介します。飯田くんです! 入つてきてー!」

あたしは教室のドアを開けた……

第5話 1年A組（前書き）

更新すゝゞ遅れてすこません（^-^）：：：なければ評価お願いしますね（^_3^）／

ガラガラガラ

あたしはドアを開けた。

タマノはさまれしている
てつか

さすがA組…思つたよりイケメン多いな…！

「じゃ、飯田くん自己紹介お願い！」

先生正にやう」と言い、またウインケした。
「近づいてお話をうながしていいよ。坂田先生

卷之三

な……なんだよ！」の重い【H】腰……やつすれえな……

11

そんな中、先生が突然「を開いた。

「はははは」ハーディは坂田君の

「あ~~~~~！ では餌田君の自口紹介は『それで紹介』でいい？ ？ じゃ、席ついてね～～～ 一番右側の一番後ろの席……」

先生がしゃべり終わる前にあたしは突然叫んだ。

あ
い
つ
が

さつきあたしを馬鹿扱いしたあいつが！

あたしをおチヒたの何たの二でし二たあし一か

一 蟻の巣の上の舞 - 二二二

あいつ……A組だつたのか……

あのまふ後でふ二殺してまふ

「飯田君？」

・・・・はつ！！

皆シーンとしずまつ、驚いたよつなあきれたよつな顔で、一いつ見してこる。

「あ……す……すいませんでした……俺の席そこですね？あ、ハイ。分か
りました……。」

あたしは、恥ずかしいやら怒りやら向やらで、そそくひと壁に向かい座った。

キーングーンカーンゴーン…丁度良くチャイムが鳴った。

「それじゃ……皆また授業で会いましょう。」

先生はそう言い 教室をあとにした

そんな中、あたしはチラチラ皆からの視線を

הנ...הנ...הנ...

下を向いて、鞄の中をじっくりと見てみると、前の奴がふり返って来た。

「飯田君……だよね？俺、吉光浩」—！浩—つて呼んでいいから—「これからよろしくな—！」

彼はそこへ手を差し伸へてきた

・・・・あたしの初めての友達

彼はにつこり微笑んで、

「奈央があ……なんか女っぽい名前だな……」

「ハハハハ……と言つて笑う浩一。

「だつて一応女だし……」

「お前面白い奴だな……初日から良いテンションだぜ……」

「そういう浩一は、グツと親指を突き出した。

「いや……浩一もなかなかだと思つぜ? …」

「そういうつてあたしも親指を突き出した。

あたしたちはニンマリ笑つた。

「あ、そうだ。後で校内説明してやるよ!」

「あ、サンきゅー! ! !」

「その前に、このクラスの事も……

「このクラスは、かなりのエリートクラスなんだ。」

「あ、そこはさつき先生が教えてくれたよ。」

「そつか。じゃあ話を先に進めるな。すげえ奴等を集めてつくつたらしこのクラスだけど、その中でもまたずば抜けてすげえ奴等が、3人いるんだ。」

「すげえな……」

「んで、そいつ等つて……どいつ等なんだ?」

浩一がしかめていた顔をもつとしかめて、説明し始めた。「一人目は、一番前のど真ん中に座つてる奴いるだろ? あいつ。あいざわおひや相澤悠也つていうんだ。見た感じも、眼鏡で賢そうに見えつから分かりやすいと思うけど……あいつの成績の良さは……半端ねえ……常にトップは当たる前。誰もがあいつだけには手が届かねえんだ……。」

「す……すげえな……」

「二人目は、一番左の列の前から三番目^目にいる斎藤一馬。(さいとうかずま)陸上専門のぱりぱリスボーツマンで、次期オリンピック選手候補としてあげられているほどだ。ただ……やっぱり顔がめちやいいだろ? だから女癖がひどいらしいぜ……」

「あらあん…」

あたし等はちよつと呆れ顔で、斎藤の方を見た。

「んで、最後の奴が、一番左の列の一番後ろのやつで、おとねべけんと長部健斗。」

「長部…健斗…
つて！あの朝の…！」

あたしをバカにしやがつた…！
つて…あいつもなのか？！

「…奈央！？続き…話すぞ？？」

「あ、わりい。続けてくれ。」

憎そうに長部を睨んでいたあたしに、浩一は話を中断し、声をかけてきた。

「あいつの父さんは、有名なピアニストの長部雅夫だ。」

「…………ええ？！あの？…」

長部雅夫つたら…世界的に有名な…

「ちなみにお母さんはフルートの先生やつてたはずだ。昔はいろいろでかいコンクールでたりして、色んな賞とつてたみたいだけどな。」

「ひ…ひえ…」

家族揃つて…

「あいつはピアノ。いつも音楽室で弾いてんけど…めっちゃくちゃ上手えんだ…！でも…コンクールとかには出ないで…ただ好きで弾いてるみてえだ。」

…そうなんだ…

へえ…

あいつが…

じつと長部を見ていると、長部があたしの視線に気付いたのか、席を立つてこつちに歩みよってきた。

「奈央……長部がこっち来るぜ……？……」

……やべえ……

あわてて視線を逸らしたが、もちろんもう遅かった。

「おー。」

長部はあたし等（ていうか、あたし？！）を見下ろし、いかにも怒つているような様子で話かけてきた。

「浩一とあたしはビクッとした。

「何こっち見てんだよ。用でもあんのか？」

冷たい目

「いや……何……」

「だつたら……！」

あたしの声は長部の声に掩き消された。

「こっちチラチラ見んじゃねえよ。チエ。」

やつこつて彼はその場を去つた。

何だあいつ。

その時あたしは怒りに震えていた。

何様だよ。

「奈央…あいつ口悪いから…実際友達も全然いねえし。気にすんな！あ、昼休み校内案内してやるから。」

ニカツと笑う浩一。

「…いろいろありがとな…浩一。」

「なあに。気にすんな！あ、先生来たぜ！」

そういう、浩一は慌てて前を向いた。

あたしは心から浩一のやれこれで感謝した。

それにたいして…

長部の田…

すげえ冷たかつた。

腹立つ。

腹立つナビ…何故か無性に悲しくもなった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4572c/>

ハリケーン ラブ

2010年12月9日14時33分発行